

行為解説の進行形の認知的分析

友 澤 宏 隆

1. 序説

言語における文法と意味の関係の追究は、つねに言語学における主要な課題の一つを占めている。とりわけ、個別言語の文法形式として確立している種々の形がそれぞれいかなる意味を表しうるのかという問題は、言語研究に従う多くの者の関心を引いてきた。英語の動詞の形式の一つとして、単純形 (simple) と対照を成すものとされている進行形 (progressive) (be + Ving) も、その意味のあり方をめぐって従来から伝統文法や真理条件意味論などを始めとするさまざまな方向から議論が行なわれてきた⁽¹⁾。個別言語に一般的に見られる多くの文法形式と同様、進行形はその一見単純に見える形態と結びついた意味の多様さで知られており、その諸相を的確に把握することが、いかなる立場からのアプローチにせよ、この形式の実像の解明における中心的部分であると言ってよい。

進行形の意味の問題は、人間の認知のあり方の反映としての言語表現のありさまを追究し、概念主義の意味観を明確に打ち出し現代の言語学において次第に重きを成しつつある認知言語学 (cognitive linguistics) における文法研究においても少なからぬ関心をもって扱われているテーマの一つである。Langacker の認知文法 (cognitive grammar) の枠組を前提として、進行形の意味／概念構造の包括的なモデル化を試みた研究もあるが、無秩序にも見える進行形の意味的拡がりとは、しばしばこの文法形式を統一的観点から把握することを妨げることがあり、従来の種々の分析の妥当性を制限する要因となっている⁽²⁾。本論考では、そうした進行形の意味的拡散の顕著な例として、いわゆる「行為解説の進行形 (interpretative progressive)」と呼ばれるタイプの進行形に焦点を当て、認知文法における進行形の分析において、そのどのような意味的特徴がそれを特異なものにしているのかについて考察し、さらにその上で、この種の進行形の特異性の解明のために有用な認知的視点を探究していく。単なる伝統的なレトリックの枠を超えて広範な言語現象への関与が注目されるようになった「メタ

ファー (metaphor)」の概念や、さまざまな言語表現の概念構造を分析するための有意義な一般的視点として提案されている「参照点 (reference point)」の概念に基づいて、文法形式の認知的分析の可能性を探っていきたいと思う。

2. 認知文法における進行形の分析

進行形の一つのタイプである「行為解説の進行形」についての検討に入る前に、まず認知文法における進行形の分析を概観しておくことにする。Langacker (1982, 1987a, 1987b, 1991) は、分析の前提として、動詞 (の語幹) を「完結的 (perfective)」なものとして「非完結的 (imperfective)」なものに二分している。この区分は、有名な Vendler (1967) の動詞表現に対応する状況の4分類との関連で言えば、前者が 'activities', 'accomplishments', 'achievements' をまとめたものに対応し、後者が 'states' に対応するものである⁽³⁾。次の二つの文の中の進行形の分詞の語幹 (learn と know) のうち、前者が完結的動詞、後者が非完結的動詞の例である⁽⁴⁾。

(1) Tom is learning the answer.

(2) *Paul is knowing the answer.

この例の対照が示すように、一般に完結的動詞は進行形で生じるが、非完結的動詞は進行形では用いられず、進行形で生じるためには動詞は完結的なものであることが要求される。完結的動詞は概念上有界的 (bounded) なプロセス (=開始・終止という両端点を含むプロセス) を表し、非完結的動詞は概念上非有界的 (unbounded) なプロセス (=開始・終止という両端点を含まないプロセス) を表す⁽⁵⁾。このように、完結的・非完結的という区分は、対応するプロセスの有界性 (boundedness) の点から規定されるものである。

上述のような動詞の分類に基づいて、Langacker (1982, 1987a, 1987b, 1991) は進行形 be + Ving の概念構造の本質の特徴づけを行なっている。これは次のようにまとめることができる⁽⁶⁾。

(3) 進行形は、完結的動詞 V と結びつき、それが表す有界のプロセス (bounded process) を基底プロセス (base process) としてその内部に限定される非有界的なプロセス (unbounded process) を規定する働きをする

上に挙げた例について見てみると、(1)の場合、動詞 learn が表す有界的なプロセスを基底プロセスとしてそれに進行形が適用されることにより、その内部に限定される非有界的な高次プロセスが規定され、「learn という行為の途中」が表される。これに対

して、(2)の場合は、動詞 know が表すプロセスは有界的なものではなく、非有界的なものであり、したがって進行形の適用の対象とはならない。これは、元の動詞が表すプロセスが非有界的プロセスである場合、進行形によってさらに非有界化すると機能上の余剰が生じるために、進行形と結合しないためと考えることができる。

進行形の概念構造の本質を「有界的な基底プロセスの内的限定による非有界化」と規定することにより、種々の関係データを包括的に扱うことが可能になる。いくつかの例を見てみよう。

- (4) a. *The boys play baseball now.
b. The boys are playing baseball now.
- (5) a. *The cat lies fast asleep by the fire right now.
b. The cat is lying fast asleep by the fire right now.
- (6) a. The city of Dover lies across the English Channel from France.
b. *The city of Dover is lying across the English Channel from France.
- (7) a. A friend of mine lives in suburban Tokyo.
b. A friend of mine is living in suburban Tokyo.
- (8) a. John is tall.
b. *John is being tall.
- (9) a. John is kind (by nature).
b. John is being kind.

上の諸例は単純形（＝非進行形）と進行形のペアを成すものであるが、各々の容認可能性は対照を示す場合とそうでない場合とがあり、それは有界的な基底プロセスの設定の可能性に基づくものである。(4)(5)のように進行形のみ可能である場合は、問題の出来事に対して通常有界的な基底プロセスを設定することしかできない場合であり、(6)(8)のように非進行形のみ可能である場合は、問題の出来事に対して通常有界的な基底プロセスの設定が不可能である場合である。また、(7)(9)のように進行形・非進行形がともに可能である場合は、問題の出来事の性質によって有界的な基底プロセスの設定可能性が左右される場合である。

上で示した Langacker の分析に基づく進行形の概念構造の規定は、進行形化の可能性に関わる例を認知的観点から説明しようとするものであるが、進行形の諸例の中にはこの規定の妥当性の範囲外にあると思われるものも存在する。それらは、1)「出来事の反復を表す進行形」 2)「いわゆる達成動詞 (achievement verbs) の進行形」 3)「近い未来を表す（現在）進行形」のカテゴリーに大別される⁽⁷⁾。

- (10) Someone was tapping on the window.
- (11) We're going to the opera a lot these days.
- (12) He's always finding fault with people.
- (13) We were reaching the summit when it suddenly began to rain.
- (14) The bus was stopping when it collided with a lorry.
- (15) Emily is leaving next Thursday.
- (16) John is rising at 5 o'clock tomorrow.

上の例のうち、(10)(11)(12)が1)、(13)(14)が2)、(15)(16)が3)にそれぞれ相当する。これらの場合、「有界的な基底プロセスの内的限定による非有界化」という規定の中にただちに収めることには問題がある。たとえば(10)の場合、この進行形は動詞 tap が表す有界的な基底プロセスの内部を指して用いられているのではなく、その基底プロセスの反復生起によって高次の有界プロセスが形成され、その高次の有界プロセスに対して内的な視点をとって非有界化が行なわれていると考えられる⁽⁸⁾。また(13)や(15)の場合、その進行形はそれぞれ動詞 reach および leave が表す有界的な基底プロセスの内部を指しているのではなく、その基底プロセスの生起に先行して設定されるあるプロセスに対して内的な視点がとられると考えられる⁽⁹⁾。これらの、いわば「非典型的」な進行形は、Langacker による進行形概念構造の本質の簡潔な定式化に抵抗すると見なされるものであるが、これらの諸例は、実は前に見た「典型的」な進行形の諸例（＝(4)－(9)の中で示されているもの）とともに、定式化された知見を生かしそれをさらに認知文法の他の知見と複合させることによって、統一的な観点からその概念構造を把握することが可能である⁽¹⁰⁾。

3. 行為解説の進行形——その特異性

2では、Langacker による進行形概念構造の本質の規定を中心として、認知文法における進行形の分析を概観してきたが、進行形のタイプの中には、これまでに見たものとは異なる性格を示すものが存在する。次の二つの例を比較してみよう。

- (17) When he said that, John was smiling.
- (18) When he said that, John was lying.

(17)の場合、従属節の示す基準時が進行形になっている動詞 smile が表す有界的な基底プロセスの内部の点に対応し、主節の進行形は従属節で表される事象が生じた時に「(主節の表す) smile という行為の途中」であったことを表すもので、これは2で提示

した進行形の概念構造の定式化によって説明可能なものである。これに対して(18)の場合は、従属節の示す基準時が進行形になっている動詞 lie (うそをつく) が表す有界的な基底プロセスの内部の点に対応するのではなく、主節の進行形は従属節で表される事象が生じた時に「それとまったく同時に」主節の表す lie という行為が生じたことを表すものであり、「有界的な基底プロセスに対する内的な視点」という前節での規定の範囲外に位置づけられることになる。すなわち、(17)の場合は、従属節で表されている事象(「John がその発言をしたこと」)は主節で表されている事象(「John が笑っていたこと」)とは(一応は)別個のものであり、前者が生じた時点で後者は生起の途中であったということであるが、(18)の場合、従属節で表されている事象(「John がその発言をしたこと」)がそのまま主節で表されている事象(「John がうそをついていたこと」)に相当するわけであり、二つの事象は互いに独立したものではなく、時間的に完全に重なり合う(すなわち、完全に同時である)ものである。

このように、(18)は(17)と異なり、前述の進行形の概念構造の規定と合致するものではなく、統一的観点からの扱いが困難な特異なタイプの進行形の例であると言える。この種の進行形は、一つの事柄がすなわち進行形の表すもう一つの事柄に相当するという意味で、「二つの事柄の同一性の表現」あるいは「等価の表現」の構成に関与するものであると言うことができるが、機能的観点から見た場合、この種の進行形は興味深い特徴を有することがわかる⁽¹¹⁾。たとえば(18)の場合、述べられているのは「(従属節で述べられている) John のその発言は、虚偽のものであった」ということであり、進行形は直前に提示されている事柄がどのようなものであるのかについて解説を与えていると考えることができる。このようにこのタイプの進行形は、発話のコンテキストの中で導入される自分や他者の行動・言動に対してそれがどのようなものであるのかという解説・解釈を加える役割を果たしていると考えられるもので、「行為解説の進行形」という名称で呼ばれる⁽¹²⁾。次の各例も同類のものである。

(19) I was only kidding you.

(20) Are you implying that I'm dishonest?

(21) Do you think he was telling the truth?

(22) In ignoring this you were making a mistake.

(23) By denying that we are religious, we are missing something important in life.

(19)の場合、発話のコンテキストの中で示される、自分が先に行なった発言があり、その発言に対する自分の真意を進行形の形が解説していると考えられる。また(20)の場合

は、直前に相手がある発言を行ない、進行形はその相手の発言の真意に対する自分の解釈を示しているのであるが、さらにその解釈が正しいか否かを相手に問うということを行なっている。(21)の場合は、後に‘when he said that’と続けることができ、やはり発話の文脈の中で示唆されているある発言に対して、進行形はそれがいかなるものであるのかを解説する働きをしている⁽¹³⁾。(22)および(23)の場合は、(18)と同様、同一文の中で進行形の動詞を含む節(=主節)に先行する部分で述べられている行動・言動を、後続の進行形の形が解説・解釈するという形になっている。このような「行為解説の進行形」の例として、さらに次のようなものがある。

(24) If you understand how aspect works in Russian, you are understanding one of the most difficult parts of the language.

(25) Some of the students who cheated in the exam did not realize that they were violating one of the rules of their school.

発話のコンテキストの中で導入される行為を解説する働きをするこれらの進行形は、日本語では「(……することは／することによって) ……する／していることになる」のような表現形式に対応することが多い(24)の場合は「(ロシア語の体のしくみを理解することは／ことによって) ロシア語の最も難しい部分の一つを理解することになる」ということであり、(25)の場合は「(試験で不正を行なうことは／ことによって) 学校の規則に違反する／していることになる」ということである。次の例も同様である⁽¹⁴⁾。

(26) Vince had a similar experience by which he learned there is no right amount of praise and attention to give. He supervised a group of eight people who reported directly to him. He believed in keeping in touch with his group, so he made a point of checking in with each one, even if briefly, at least once a day. Certain he *was being* a responsible and caring boss, he was shocked when a new system of soliciting evaluations from subordinates was instituted.

この場合、Vince は直属の部下八名との接触を密に保つのがよいと信じて、毎日少なくとも一回は部下一人一人に声をかけることにしていたのであるが、そうすることによって Vince は、「自分が責任感のある部下思いの上司であることになる」と確信していた、ということである。自分の行為を自分なりに(心の中で)解釈していたということである。

4. 行為解説の進行形の認知的分析 (1) ——メタファーの視点から

3では、機能的観点から「行為解説の進行形」と呼ばれるタイプの進行形に関して、2で行なった進行形の概念構造の規定から見たその特異性について論じた後、その種々の具体例を観察してきたが、ここではこの種の進行形を認知的観点から捉え直し、進行形という文法形式の統一的な把握に向けて考察を進めていきたいと思う。

前節で述べたように、この「行為解説の進行形」は、ある事柄が進行形の表すもう一つの事柄に相当することを表し、「二つの事柄の同一性の表現」あるいは「等価の表現」の構成に関与するものであると言うことができるが、「二つの事柄の同一性の表現」ということから、この種の進行形は、A is B (A と B は Ving の形の動名詞句) の形の表現が変形されたものであるという説がある⁽¹⁵⁾。これは、「動詞の ing 形」という表層の形式を共有する進行形と動名詞のつながりを模索する上では意味のある考え方であると思われるが、もう一つの可能性として、この場合このタイプの進行形を一種の比喩的拡張に基づく形式と見なし、統一的観点からその概念構造を把握することが可能な他のタイプの進行形との接点を探るという方法も考えられる。すなわち、ある事柄が進行形の表すもう一つの事柄に相当し、後者が前者を解説する役割を果たしているということは、前者と後者との間に、「メンバーとカテゴリーの関係」が成立しているといえることができる。これは、進行形になっている動詞が表す事柄を一つのカテゴリーとしたとき、その事柄に相当する事柄はそのカテゴリーのメンバーの一つとして、その中に含めて位置づけることができるということである。このように、「カテゴリーとそのメンバーの関係」は、集合の包含関係であるが、この「集合的」な包含関係を進行形が本来表す「時間的」な包含関係の形式を用いて表現したのが、この「行為解説の進行形」であると考えることができる⁽¹⁶⁾。すなわち、2で示した、「有界的な基底プロセスに対する内的視点」という統一的な規定は、基準となる時点が進行形になっている動詞の表す有界的な基底プロセスの内部の点に対応することを意味するもので、「(進行形になっている動詞が表す有界的な基底プロセスに対して) 内的な視点をとる時点」と「進行形になっている動詞が表す有界的な基底プロセス」との間には時間的な包含関係が成立していると考えられるが、この時間的な包含関係が集合的な包含関係の表現に比喩的に転用されて、「(進行形になっている動詞が表す有界的な基底プロセスに対して) 内的な視点をとる時点」が「進行形になっている動詞が表すカテゴリーのメンバー」に対応し、「進行形になっている動詞が表す有界的な基底プロ

セス」が「進行形になっている動詞が表すカテゴリー」に対応するという関係になっているのが「行為解説の進行形」であると考えることができる。これを3で見た次の例で考えてみよう。

(17) When he said that, John was smiling.

(18) When he said that, John was lying.

(17)は「時間的包含関係」によって特徴づけられる場合であり、従属節の示す「(進行形になっている動詞が表す有界的な基底プロセスに対して) 内的な視点をとる時点」が主節における「進行形になっている動詞が表す有界的な基底プロセス」に含まれていることを表すが、これらをそれぞれ「進行形になっている動詞が表すカテゴリーのメンバー」と「進行形になっている動詞が表すカテゴリー」に対応させた形になっているのが、(18)の「集合的包含関係」によって特徴づけられる「行為解説の進行形」である。同一の形式が異なる二つの関係を表し、それらが整然とした対応を成しうすることは注目に値すると言ってよい。

上では、いわゆる「行為解説の進行形」を時間的包含関係から集合的包含関係への比喩的転用という観点から捉え、進行形という文法形式の統一的把握への接近を試みたが、この比喩的転用は「時間的關係」を起点領域 (source domain) とし、「集合的關係」を目標領域 (target domain) とした異なる概念領域間の写像関係であり、Lakoff (1987) で提唱された認知プロセスの一種である「概念メタファー (conceptual metaphor)」の一例として理解することができる。概念メタファーにおいては、構造化に用いられる概念領域 (すなわち、起点領域) は構造化の対象となる概念領域 (すなわち、目標領域) よりも一般に具体性の度合いが高く、より具体的な概念を用いてより抽象的な概念を構造化するという形になるのが普通である。ここでは「時間的關係」を用いて「集合的關係」を構造化するという関係になっており、前者が後者よりも具体度の高いものとして認識されていることがわかるが、「時間的關係」は「空間的關係」との対照においては言うまでもなく後者のほうが具体度が高いものとされ、前者の構造化に後者が用いられるのが一般的である⁽¹⁷⁾。

異なる領域間の概念メタファーという認知的視点の援用により、「行為解説の進行形」の十全な解明への一つの道筋が開かれたと言えるが、ここで考えておくべき一つの問題がある。それは、このタイプの進行形がその特異性ゆえに従来の進行形の理論的研究の中で取り上げられる機会が稀であったにもかかわらず、すでに観察した多くの例の存在が示唆しているように、この種の進行形がなぜ日常の用法の中で遍在的でさほど特異なものとは意識され難いのかということである⁽¹⁸⁾。分析における特徴づ

けと日常レベルでの言語的事実の不一致は一見不可解な印象を与えるものであるが、後者の圧倒は前者のあり方に対してある種の疑問を投じるものである。すなわち、この場合、概念メタファーにおいて関係する二つの概念領域は抽象レベルにおいて「包含関係」という強固な構造的共通性を内包しており、その優勢が実際の用法においてはこの種の進行形に対して、典型的な進行形と同様の自然な色彩をもたらししているのではないかと考えられ、そのような意味で、分析のレベルでの従来のレッテルは必ずしも妥当なものとは言い難い可能性があるのではないかと思われる。

5. 行為解説の進行形の認知的分析 (2) — 参照点構造の視点から

4では、「行為解説の進行形」を「時間的關係」と「集合的關係」という異なる領域間の概念メタファーに基づいて捉えることにより、進行形という文法形式を統一的観点から把握する道を探ったが、ここでは進行形概念構造を分析するためのもう一つの認知的視点として、認知言語学における重要な役割を果たすものと期待される「参照点 (reference point)」の概念に基づいて、このタイプの進行形の認知的分析の可能性を探究していきたいと思う。

5. 1 認知文法における「参照点」の概念

初めに考察の前提となる「参照点」の概念について、基本的な理解を持つことにする。認知言語学の主要な展開の一つである Langacker の認知文法の枠組においては、人間の概念構造を形作る基本的要素の一種としてさまざまな「認知能力 (cognitive abilities)」の存在が仮定されている。たとえばわれわれは言語外世界の中にある対象に対して「注意 (attention)」を向けたり、その対象のある部分を選び出してそれに特に注意を集中させ、その対象に「図 (figure)」と「地 (ground)」の構成を当てはめたりする能力を持っている⁽¹⁹⁾。そのような能力はおそらく生得的なものであると考えられ、人間が外界を認識しそれを構造化する上で必須のものであると見なされるが、そうした能力の中で種々の言語表現の概念構造との関係で注目されているものの一つが「参照点」に関する能力（「参照点能力」と呼ばれる）である。われわれは、ある事物（＝人、もの、事態など）に対して注目や想起などの心的な接触をしようとするときに、それに直接アクセスするのではなく、それと密接に関連していかつアクセスが容易な別の事物にまずアクセスし、それを経由（＝参照）して当初の事物に間接的にアクセスすることがしばしばある。そのような場合、その経由される事物（＝後者

の事物)を「参照点」, その「参照点」を経由して到達される事物を(=前者の事物)を「標的(target)」と呼ぶ(また, ある「参照点」を介してアクセス可能な対象(すなわち, 潜在的な「標的」)の集合は「支配領域(dominion)」と呼ばれる)⁽²⁰⁾。このような「参照点」および「標的」に関わるメカニズムを司る認知能力が「参照点能力」と呼ばれるものである。

参照点能力の発現する現象(「参照点現象」と呼ばれる)は言語表現のさまざまな側面に見られるが, その代表的なものとして知られているのが「所有(possession)」や「メトニミー(metonymy, 換喩)」の表現である。次例を見よう。

(27) John's house, Mary's mother.

(28) I enjoy listening to CDs.

(27)で John's house という表現を例にとると, この表現は全体としては「house という集合の中の特定の一つの要素」を指しているのであるが, 「その特定の一つの要素」に直接言及／アクセスすること(すなわち, 世界に無数に存在する houseの中からある特定の一つのものを指し示すこと)は困難であるため, その「所有者」である John という人にまず言及／アクセスし, それを介して(=参照して) house の集合の中の特定の一つのものに言及／アクセスするという形をとっている。すなわち, その house の「所有者」である John という人を「参照点」として媒介し, 間接的に「標的」であるその特定の house に言及／アクセスするということを行なっているのである。これは換言すれば, 'house' という語の指示対象の特定ののために, それが指す house の「所有者」の参照の経路が行なわれるということである。また, (28)の場合は, 語としては 'CDs' となっても実際に listen to するのはその CD の「円盤そのもの」ではなくそこに載っている「音声」なのであるが, その「音声そのもの」に直接言及／アクセスするよりも(固体として存在するという理由で注目されやすく, したがって言及／アクセスの容易な) CD の「円盤」にまず言及／アクセスし, それを参照して(=それを「参照点」として)その「円盤」に載っている「音声」(=「標的」)に間接的に言及／アクセスするということを行なっている。これは換言すれば, 'CD' という表現の「この場合の実際の指示対象(=「CDの円盤に載っている音声」)」の特定ののために, その「通常の指示対象(=「CDの円盤」)」の参照が経由されるということである。この場合, 'CD' という表現に関して, 後者と前者(=「CDの円盤」と「CDの円盤に載っている音声」)はその「プロファイル(profile)」と「活性領域(active zone)」に相当し, 「メトニミー」の関係が成り立っている⁽²¹⁾。

5. 2 行為解説の進行形の参照点構造

5. 1では、さまざまな言語表現の概念構造を分析するための認知的視点として重要な役割を果たす「参照点」の概念について概観した。ここではこれを前提として、「行為解説の進行形」における参照点の構造について考察を進めていくことにする。

4では「行為解説の進行形」を包含関係を軸として成立する、「時間的關係」と「集合的關係」という異なる領域間の「概念メタファー」の観点から捉えたが、これは概念構造という点からすれば、このタイプの進行形に関してメタフォリカルな概念構造を仮定することが可能であるということである。これに対して、2で提示した、「有界的な基底プロセスに対する内的視点」という統一的規定にかなう他のタイプの進行形は、そのようなメタフォリカルな概念構造は仮定されず、その概念構造はもっぱら「時間的關係」に基づいて形成される。このように、進行形という文法形式は、その概念構造に関して、概念メタファーを媒介とするか否かで異なる二つのものがありうるということになるのであるが、ここで注意を喚起されるべきなのは、ある進行形の形に対して、その可能な二つの概念構造のうちから妥当なものを選択する過程のあり方である。一般に、ある進行形の文があった場合、通常選択されるのは非メタフォリカルな概念構造のほうであり、この場合はその選択に関して何らかの媒体が介在するわけではない。これに対して、ある進行形の文に対してメタフォリカルな概念構造が選択される場合、すなわち「行為解説の進行形」の場合は、その概念構造の選択に関して発話のコンテキストの中で導入される要素（＝他の行動・言動の叙述）の参照が行なわれる。そのような、参照対象となる「コンテキスト内要素」は、その進行形の文と同一文中に生じる場合もあれば（(18), (22), (23), (24), (25)）、そうでない場合もある（(19), (20), (21), (26)）。このように、「行為解説の進行形」の場合、その概念構造の選択は、「(同一文中またはそれ以外に生じる) コンテキスト内要素」を「参照点」とし、それを媒介とすることによって達成され则认为することができる。すなわち、このタイプの進行形は、参照点構造を内包する「参照点構文」として捉えることが可能である。概念構造の選択の過程に、参照点として機能するコンテキスト内要素が介在するかどうか、この種の進行形とそれ以外の進行形を区別する要因となっているのである。

6. 結語

本論考では、英語の文法形式として確立している進行形の中で、従来統一的観点か

らの扱いに抵抗するものとされてきた「行為解説の進行形」に焦点を当て、その特異と主張される特徴を考察し、その解明に向けて認知的視点に基づく分析の可能性を追究してきた。「有界的な基底プロセスに対する内的視点」という認知的な規定によって特徴づけられる典型的な進行形と「行為解説の進行形」を結びつけるための橋渡しとして「概念メタファー」を援用し、その概念構造の形成を「参照点構造」の観点から把握することによって、このタイプの進行形の分析に一定の方向性を提示することができたのではないと思われる。ただし、これらの分析の方向性は、言うまでもなく「行為解説の進行形」の諸相の一部に光を照射するものにすぎず、その解明にはさらなる角度からのアプローチが求められるものであり、さらに、個々の文法形式を個別に分析するに留まらず、関連する種々の形式の相互の認知的ネットワークの構築を目指すことも重要であると考えられる⁽²²⁾。文法形式の認知的分析の本格的な推進によって、これらの諸問題の探究が前進することを望むものである。

注

1. 以下で単に「進行形」と言うときは、英語の進行形のことを指すものとする。
2. 進行形の意味／概念構造の包括的なモデル化の例としては、友澤（2002）を参照。以下の叙述は、友澤（2002）に基づく部分を含む。
3. Langacker (1982), Langacker (1987a, 7.0., 7.2.), Langacker (1987b, 9.), Langacker (1991, 5.2.2., 6.2.1.), および Vendler (1967, Chap. 4) を参照。
4. Langacker (1987b, p. 79) 参照。
5. Langacker の認知文法では、形容詞や動詞分詞は時間性を持たない非時間的關係 (atemporal relation) を表すが、動詞語幹は時間軸の中に位置づけられたプロセス (process) を表すとしている。Langacker (1987a, Chap. 6, Chap. 7) を参照。
6. Langacker (1982, pp. 281-283), Langacker (1987a, p. 256), Langacker (1987b, 9., 10.), および Langacker (1991, 5.2.2.) を参照。
7. ここで言う「達成動詞」とは、Vendler (1967) の四分類における 'achievements' (win the race, reach the top など) に対応するものを指す。
8. Langacker (1982, p. 301) および Langacker (1991, p. 209) を参照。
9. その先行プロセスをも含んだものを進行形になっている動詞の基底プロセスとして仮定する「文法的強制 (coercion)」に基づく分析もある。Croft (1994, pp. 6-8), Hatav (1997, pp. 100-101), Taylor (1998, p. 194) などを参照。
10. 注2で言及した友澤（2002）では、Langacker の認知文法において大きな役割を果たす「概念構造の階層性」に着目することにより、進行形の概念構造を統一的な観点から包括的に捉えるモデルを提示している。

11. Jespersen (1931, § 12.8), 大江 (1982, pp. 96-98), Quirk et al. (1985, p. 198) を参照。
Quirk et al. (1985) はこの種の進行形について、「他の同時的な出来事と相関関係または同一性（の関係）を持つ」ものであるとしている（Quirk et al., 1985, p. 198）。なお、ここでの議論は友澤（2002, pp. 156-158）に基づき、それを発展させたものである。
12. 毛利（1980, pp. 115-131）および長谷川（2002, pp. 149-170）を参照。
13. この例は Quirk et al. (1985, p. 198) による。
14. これは Tannen (1994, p. 67) の一節である。
15. 毛利（1980, p. 116）を参照。
16. 大江（1982）は、この種の進行形は「等価の修辭的表現」であり、出来事の等価性を出来事の共起性（すなわち、同時性）の表現に用いられる進行形を含む表現型に置き換えたものであるとしている（大江 1982, pp. 96-98）。
17. たとえば, at/in/on などの前置詞は、本来は位置や場所などの空間的關係を表すが、時間的關係の表現に広く転用されており、空間から時間への転用の傾向性の強さを示す典型的な例である。ただし、その逆の方向、すなわち時間的關係から空間的關係への転用もないわけではなく、次の文中の形容詞 occasional などはその例である。
There were occasional pine trees on the roadside.
Our apple chips are carefully sorted out but may contain occasional fragments of seeds or stems.
18. この種の進行形が従来の理論的研究の中で取り上げられる機会が稀であるということについては、長谷川（2002, p. 149）を参照。
19. Langacker (1987a, Chap. 3) および Langacker (1999, Chap. 1, 1.1.) などを参照。
20. Langacker (1993), Langacker (1999, Chap. 6), および『認知科学辞典』の「参照点」の項の解説を参照。なお、「標的」のかわりに「目標」という用語も用いられる。
21. Langacker (1993, pp. 23-25), Langacker (1999, Chap. 6, 4.3.), および『認知科学辞典』の「参照点」の項の解説を参照。
22. この種の進行形と分詞構文との関連については、Tomozaawa (2003, p. 509) を参照。

参考文献

- Croft, W. (1994) "Aspect, Countability, and the Conceptual Unity of Instantiation," Unpublished manuscript.
- 長谷川存古 (2002) 『語用論と英語の進行形』 関西大学出版部.
- Hatav, G. (1997) *The Semantics of Aspect and Modality : Evidence from English and Biblical Hebrew*, John Benjamins.
- Jespersen, O. (1931) *A Modern English Grammar on Historical Principles*, Part IV, George Allen & Unwin.
- Lakoff, G. (1987) *Women, Fire, and Dangerous Things : What Categories Reveal about the Mind*, University of Chicago Press.

- Langacker, R. W. (1982) "Remarks on English Aspect," in Hopper, P. J. (ed.), *Tense-Aspect : Between Semantics and Pragmatics*, John Benjamins, 265-304.
- Langacker, R. W. (1987a) *Foundations of Cognitive Grammar*, vol. 1, *Theoretical Prerequisites*, Stanford University Press.
- Langacker, R. W. (1987b) "Nouns and Verbs," *Language* 63, 53-94.
- Langacker, R. W. (1991) *Foundations of Cognitive Grammar*, vol. 2, *Descriptive Application*, Stanford University Press.
- Langacker, R. W. (1993) "Reference-point constructions," *Cognitive Linguistics* 4 (1), 1-38.
- Langacker, R. W. (1999) *Grammar and Conceptualization*, Mouton de Gruyter.
- 毛利可信 (1980) 『英語の語用論』 大修館書店.
- 日本認知科学会 (編) (2002) 『認知科学辞典』 共立出版.
- 大江三郎 (1982) 『動詞 (I) 講座・学校英文法の基礎 第4巻』 大修館書店.
- Quirk, R., S. Greenbaum, G. Leech and J. Svartvik. (1985) *A Comprehensive Grammar of the English Language*, Longman.
- Tannen, D. (1994) *Talking from 9 to 5 : Women and Men in the Workplace : Language, Sex and Power*, Avon Books.
- Taylor, J. R. (1998) "Syntactic Constructions as Prototype Categories," in Tomasello, M. (ed.), *The New Psychology of Language : Cognitive and Functional Approaches to Language Structure*, Lawrence Erlbaum, 177-202.
- 友澤宏隆 (2002) 「英語進行形の概念構造について」西村義樹 (編) 『認知言語学 I : 事象構造シリーズ言語科学 第2巻』 東京大学出版会, 137-160.
- Tomozawa, H. (2003) "Aspects of the Semantics of the English Participial Construction," *English Linguistics* 20 : 2, 493-517.
- Vendler, Z. (1967) *Linguistics in Philosophy*, Cornell University Press.